

字を読んでいるが、差異が生じたことは前掲、註釈の説明で充分であろう。それ故、「かくれぬ」で諸本の異同を見ない『古今集』の解としては「水草がしげって水の表面が見えない沼」の意と理解すべきである。この意味では古今集の概ねの現代の註釈は誤りないことになる。

最初に掲げた小沢正夫博士の註は、それが大きな古今集の註釈としては最近の作であり、先行の註釈をよく吟味してなされた、行きとどいた好著である。ここで出された小沢博士の註は、遡源的なもので、『万葉集』の「隠沼」から出た語であるから、『万葉集』の意をもって、註をほどこされたものと見られる。『万葉集』のもとの意を尊重されたのはその通りのことと考える。しかし、万葉集の旧訓の存在を考慮に入れねばならなかったと筆者は考える。

「かくれぬ」の語が『万葉集』の旧訓に存していることは、注意しなければならぬが、「誤読」されて「かくれぬ」が出来た、と軽く考えることは好ましい態度ではあるまい。「かくれぬ」の語が先にあって、それが旧訓に入った、と考えるのが順序なのではないか。少くとも今の場合はそう考える。『古今集』に使用された、という、それだけの理由で、「かくれぬ」の語は、誤読の所産という曖昧な理解ですますことは出来ない。それが単純な誤読という観念でのみ律しられるとするなら、勅選集に両語が併用されている、という事実を解釈するのに窮することになる。

後撰集卷十、恋二、六〇七

人をいひはじむとて

忠房朝臣

隠れぬに忍び佗びぬる我身かなるでの蛙となりやしなまし

後拾遺集卷十五、八七二

村上の御時うへにのぼりて侍りけるにうへの御とのごもりにければ帰り下りてよみ侍りける

斎宮女御

隠れぬにおふる菖蒲の浮寐して果てはつれなくなる心哉

この「かくれ沼」はいずれも安定した使用である。

一方、「こもりぬ」については、

続古今集、卷六、冬、六二七

氷をよみ侍りける

権大納言顯朝

冬くればすさの入江のこもりぬも風寒からし氷柱るにけり

これも前述した意味において、安定した使用である。

安定して両語が併存することは、それぞれが別語として存在することになった、ということである。

葉集』を考える前に、一応、注意しておこう。

諸註釈書が「かくれ沼」が『万葉集』の「隠沼」の誤読であることを指摘しているが、誤読のあり方が問題になるし、誤読の際の意義の変化と『古今集』への接続のし方については考えておかななくてはなるまい。『万葉集』の「隠沼」の用語例は七箇所ある。この訓義については、二〇一（巻二）の沢瀉久孝博士『万葉集註釈』が詳しくて、意を尽くしている。『古今集』への接続についても手がかりがあると考える。

#### 『万葉集』巻二、二〇一

埴安の 池の堤の 隠沼乃 行えを知らに 舎人はまとふ  
である。

隠沼の 旧訓にカクレヌノとあるが、西本願寺本にはコモリヌノとあり、代匠記には「隠沼乃 下從恋余」(十二、三〇二三)とある同じ歌が、「許母利奴能之多由孤悲安麻里」(十七、三九三五)とあるによつて、コモリヌと訓むべしとしたのが正しい。「隠」の字はカクルともコモルとも両方に訓まれてゐる。沼は倭名抄(一)に「和名奴」とあり、右に引用したやうに「許母利奴」とも、また「潮毛可奈比沼」(一、一八)などヌの仮名に用ゐられてゐる事も多く、単にヌと云つた事はたしかであるが、また「奴麻布多却」(十四、三五二六)、「水鳥須太久水奴麻」(十九、四二六一)ともあつてヌマとも云つた。「こもりぬ」の義については考に「こは堤にこもりて水の流れ行ぬを、舎人の行方を

しらぬ譬にいへれば、こもりぬとよむ也」といひ、また頭註に「後世あし薄などの生しげりて水も見えぬを、かくれぬといふと心得て、こゝを訓つるはひがこと也」とも云つてゐるが、古義には「草などの多く生じ茂りて、隠れて水の流るゝ沼なり」といひ、後説もうなづかれるやうに考へられ、それに従ふ書もある。それに対して講義には「こもり沼」の用字をあげた後、「『コモル』といふ語の普通の意味を考ふるに、ある場所の中に在りて外と連絡を絶てることをいふ語なるは、家に籠る、城に立てこもるなど、いふ場合にても知るべし。かくて『こもる』と『かくる』とは意異なりといふべし。」と云つて考の説を可とされたに従ふべきである。今の人は「こもる」と「かくる」とをほぼ同義に感ずる為に古義の説にも心惹かれるのであるが、両者の区別を考へられた講義の説はくはしく、その事は「隠江」(三、二四九)や初瀬の枕詞「こもりく」などを見ても「こもり」は人の目を避ける意味を持つ「かくる」とは別である事がわかる。即ちこは堤にかこまれて水の流れゆく方のない沼の意で、次の句の序となつてゐる。「池の堤の隠沼」といふいひ方が少しあいまいで、池の他に沼があるやうにも見えるが、前の句でも述べたやうに、これはその池の堤につつまれた沼で、結局埴安の池そのものを「こもり沼」と云つたのである。

以上、詳細に述べられた見解は、適切で従うべきものと思う。「旧訓カクレヌ」新訓コモリヌ」は、二〇一の場合、その様になつてゐるし、大勢はその様に考えてよいことである。「コモリヌ」と「カクレヌ」とは同じ文

ら見ても水面が見えず、「沼」がかくれてしまっている、ということになる。これは前掲の古典全集の場合の「水の出口のない沼」の理解とは異なる。

朝日古典全書（西下経一博士）

隠れ沼。 草に掩われて水の見えないもの

語義としては佐伯博士と同じである。

松田武夫博士『新釈古今和歌集』

「隠れ沼」は上に草が茂って人に知れない沼。下に水を湛えているところから「下」にかかる枕詞となる。

一〇三六では

草木に覆われて、水面が見えないようになってゐる沼。万葉集の「隠れ沼」（二〇一、一八〇九他）を読み違えたものであろう。

多くの註と同じであるが、「読み違えた」時に語義の変化を来たさなかったであろうか。その点が曖昧なのである。

金子元臣氏『古今和歌集評釈』

草などうへに茂って、水の下に潜った沼をいふ。故に「したに通ひて」にかかる序とした。

これも概ねの説と同じである。

窪田空穂『古今和歌集評釈』

隠れ沼の 草に蔽われて、水の隠れている沼。草の下にある水が人目にはつかずに流れる意で、下の句の譬喩。

以上で、主要な『古今集』の註釈の概観を終る。「かくれ沼」の語義としては、大要、二種の理解があることがわかる。即ち、小沢正夫博士の「出口がなくて、水が地下をくぐって流出する沼」という解、即ち、他と連絡を失ってしまった沼、の意味である。その他の註は表面を草で覆われて、水面が見えなくなった沼、の意である。

『古今集』としては、『古今集』においてこの語義はいかに解すべきか、が、第一の問題になることは勿論である。ただ、それが『万葉集』の用法というものと、如何に連絡するか、ということが次の問題になる、ということである。

『古今集』六六一が、どうなっているのか、全体の意を見てみようと思う。小沢正夫博士の口語訳を掲出する。

末摘花ならいざ知らず、私は胸の思いを顔色に出すまいよ。沼の水が地下をくぐるように、陰にこもった思いがついに私を恋い死にさせよとも。

となる。諸註釈の歌意のとり方は、概ね、右に同じである。歌意の中心は「下にかよひて」である。「心の中だけで」の意である。この意味では諸註に異論はない。ただ諸註に言及はないが、後世ぶりに理解して、人目が多いので、と考える必要はない。『古今集正義』の言うように「下に通ふは、只心のみ行かふ事にて、畢竟、逢がたきをいふ」である。

すると、「かくれ沼」も、外と連絡を断った沼というよりも、「植物が茂って、表面が見えない沼」と考える方が、適切である。このことを、『万

# 「かくれ沼」と「こもり沼」

——古今集の用語——

『古今集』卷十三、恋歌三、六六一に

寛年御時后官歌合の歌

紀友則

紅の色にはいでじ隠れ沼の下に通ひて恋ひは死ぬとも

第三句の「隠れ沼」の註釈は諸註釈書にみるかぎり、なお曖昧である。この語は「古今集」のうち、他に、もう一箇所使用される。

卷十九、雑体、一〇三六

ただみね

隠れ沼の下より生ふるねぬ名は立てじ来るな厭ひそ

である。現代の註釈書から見えてゆこうと思う。詳しい註は初出の六六一の方にあるから、断りなしに掲げるのは六六一の方である。

小学館古典全集（小沢正夫博士）

「下」の枕詞。「隠れ沼」は『万葉集』の「こも（隠）り沼」で、出

口がなくて、水が地下をくぐって流出する沼。憂鬱な気分を表わす場合の序詞や枕詞に用いられる。

一〇三六では

水の出口のない沼。

と簡単に集約されている。

『万葉集』を引き合いに出されている。これは誤りないことであろうが（なお、後述）、それと、『古今集』の註に『万葉集』の註をそのまま延長することが出来る、という意味であるか、どうかということは、別の問題になるであろう。「水の出口のない沼」とは、『古今集』の註として記されているのであるが、それは『万葉集』の「こもり沼」とはどういう風にかかわっているのか、という問題が存在することになる。なお、他の註釈を見てみよう。

岩波古典大系（佐伯梅友博士）

かくれぬの 枕詞。万葉集の「隠沼（かづみ）」を読み違えた語であろう。草などにおおわれている沼なので、「した」の枕とする。

この説は前掲の小沢博士の場合とはいろいろの意味で異なっている。「万葉集」を読み違えた語」という判断がはっきりしていること。「草などにおおわれている沼」という意味は草が表面一ぱいにしげってしまつて、外か

奥村 恒哉